「ヴルタヴァからドナウ＝中欧の旅」

南 部 昌 弘

０５年５月２０日から３１日までベルリン、ドレスデン、ザルツブルグ、プラハ、ウイーン、ブダペスト１０泊１１日の旅を夫婦でする。
妻が膝が悪く、長時間のエコノミーは辛いというので、最後の思い出作りのつもりで「ビジネスクラスで行く中央ヨーロッパ１２日間」というツアーに参加する。
「ビジネスクラスで行く・・・」というだけあって、メンバーの平均年齢は推定７２歳くらい。最高齢者は大正生まれ、我々夫婦は若い方で下から３組くらい。話してみると皆海外旅行に行きまくり、この旅行を終わったら「次はどこに」とかの話題ばかりで驚いたり、呆れたり。
　いつものことながら、ものぐさでしっかりメモなどしていないので記憶を頼りに旅の思い出のつれづれを綴ってみようと思う。
というわけで。

第1章　5月はすべてを新しくする

ドイツの童謡（日本の「ちょうちょ」の歌の原曲）に「ドイツの春は５月より始まる、５月はすべてを新しくする・・・」というのがあるらしいが、今回の旅行でなにが一番よかったかと尋ねられたら躊躇なく「季節が一番・・・」と答えられる。
　日本の北海道のようにここ中央ヨーロッパの春も一度に花が咲く。
旅するいたるところでポプラ、ライラック、マロニエ、スズランといった定番の花はもとより、日本で良く見られる山吹、ゆり、藤、おだまき、踊子草といった山野草もすこし田舎に行けばいたるところで見かけられる。
飛行機の上から見ると、アブラナの黄色、ライ麦、大麦の緑、遅いチューリップの赤、チューリップを刈り取ったあとの赤褐色の土の色等の織り成すパッチワークの畑は、「はるばる来たぞ！」と長旅の疲れを一瞬癒される。バスで移動中の車窓からも至るところで歓声が上がる。
　今回旅したヨーロッパの町も田舎もみな大きな森にすっぽり包み込まれていて、新緑のみどりが目にしみ、ところどころに点在する人家の赤いレンガとのコントラストがひときわ美しい。そこにポプラの花の白い綿毛がふわふわ漂う様はまさ

に今「中欧ヨーロッパの春真っ盛り！」をしみじみと実感したものです。

第2章　宮殿･庭園数あれど

観光ツアーの常識として有名な宮殿、庭園めぐりは数知れず、ウイーンのシェーンブルン宮殿・庭園、ベルベデーレ宮殿・庭園、ザルツブルグのミラベル宮殿・庭園にホーエンザルツブルグ城、ポツダムのサンスーシー宮殿・新宮殿・庭園、ドレスデンのツヴィンガー宮殿等々。

それぞれに由緒、謂れ、薀蓄は数々あれど、独断と偏見でいえばヨーロッパの「宮殿・庭園」に関してはヴェルサイユ宮殿・庭園に勝るものはないように思われる。
事実上記の宮殿・庭園の多くはヴェルサイユを模したあるいは超えようと意図したものと聞いた。

今回拝観した宮殿のなかで特に気に入ったのは、サンスーシー新宮殿の海底をイメージした洞窟の間だ。天然の貝殻や、珊瑚、宝石の原石をちりばめ尽くした部屋は、他で見られないものでその上避暑を目的に作られただけあって冷んやりしていて（外が暑かったせいもあり）すこぶる気持ちのいいものであった。

サウンド・オブ・ミュージックで有名なミラベル庭園はそのうたい文句に「季節ごとの美しい花が咲き誇る花壇が目を楽しませてくれる・・・」とあるが、丁度花の苗を植えたばかりで本来の姿でなかったのは残念だった。

第3章　世界遺産あれこれ

今回の実質９日間の旅行で「世界遺産」と名つく名所旧跡はサンスーシー宮殿に始まりパノンハルマの修道院からブダペストまで実に８箇所も見学させていただいた。毎日毎日が世界遺産の旅といえた。世界遺産の文化遺産の分布を見ると圧倒的にヨーロッパに集中しているので、ヨーロッパを旅すると自然とこうなるのは当然といえば当然だが、こうも毎日だとその有難みが薄れるというのは贅沢な悩みか。

確たる根拠もないが、ここにきて世界遺産についてふと疑念が沸いてくる。
日本でも「知床」で大騒ぎしていたし、「熊野古道」では住民と揉めている。

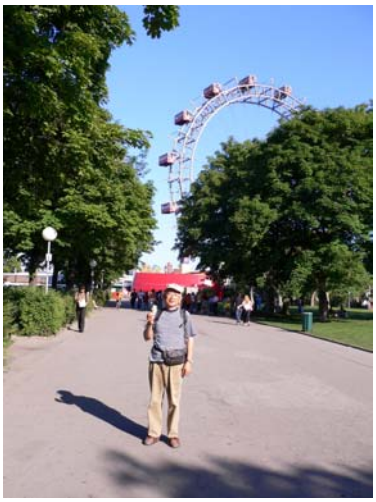
世界遺産は毎年一回開催される世界遺産委員会で審査され、認められればそのリストに登録されるそうだから、このままいけば毎年増え続けることになる。財政不足で紛争の絶えない途上国は別にしていやしくも先進国といわれる国々は世界遺産というブランドに頼らず、自国の誇るべき自然・文化・伝統を自身の理念や基準で自前で守る気概が必要ではないか、と余計な事までつい考えてしまう。

今回の旅行で特に印象に残ったのはチェコのチェスキー・クロムロフの中世の時代をそのまま残した町並みであった。

町の真ん中をヴルタヴァ川が蛇行し、ゴシック様式からルネッサンス様式、バロック様式の異なった様式の建築物が周りの森と水辺にうまく調和し、しばし歴史の中にタイムスリップしたような不思議な感動に誘われた。

第4章　ウイーン

ウイーンといえば音楽の町、芸術の町。ツアー観光の目ダマ「シェーンブルン宮殿」、「ベルベデーレ宮殿」等駆け足で見学。その後一行はバスでバーデンに向かい温泉で疲れを癒そうとの計画であったが、我々夫婦は折角の機会なので、それをパスして自由行動で市電とバスと地下鉄に乗り、美術館めぐりと、映画「第三の男」の大観覧車に乗りたいとの思いを実現しようと考えた。



美術館の一つはヨーロッパの三大美術館のひとつの「美術史博物館」と決めていたがあとひとつは、たまたまホテルの部屋にクリムトの絵が３点ばかり飾ってあって興味をひかれベルベデール宮殿上宮まで取って返すこととした。

はっきりいってそれまでクリムトに対しそれほど関心がなかったが本物に触れてみてその感覚的に繊細で耽美な世界に魅せられてしまい、いままで食わず嫌いで通してきた世紀末芸術にあらためて目を開かせてくれた。

もうひとつの旅の大きな目的は「大観覧車」。映画「第三の男」は遠い昔の青春

時代以来幾度となく観た戦後の荒廃したウイーンを舞台とした名画で、あのアントン・カラスの旋律とともに黒白のコントラストの効いた映像の数々は今も忘れられない衝撃でした。中でも大観覧車の中でのＪ・コットＯ・ウェルズのせめぎ合い。ハリー・ライムの名セリフ「スイス５００年の民主主義と平和がなにを生んだか・・鳩時計が精一杯」はまさに強烈なパンチとして今も胸に深く刻まれています。

大観覧車は市電のプラターシュテルン駅を降りるとすぐの遊園地の入り口にありました。
籠の大きさはバスほどあり、２０人くらい乗れるもので、観覧車の直径は６１ｍもありまさに「大」観覧車でした。最高点からウイーンの街が一望できるかと期待しましたが､観覧車の位置が､ウイーンの中心から北東のプラター地区にあり、一望とはまいりませんでした。しかし映画の一シーンを共有できたという大きな感慨を得ました。
　またうれしいことに、ベルベデール宮殿でウイーン市復興５０年記念のイベントが開催されていて、アントン・カラスのチターの『本物』が丁度展示されていて偶然目にする事ができました。また場所はブダペストでしたが、夕食に出かけた生演奏のあるレストランで、われわれのリクエストにこたえ「第三の男」のテーマが演奏され旅のエンディングにふさわしい演出となりました。

第５章　**プラハとブダペスト**

　旅立つ前に多くの人からプラハの街は素晴らしいと聞いており、自分としても最も行きたかった憧れの街がプラハとブダペストでありました。
チェコのプラハを思う時必ずスメタナの「わが祖国」の第２楽章と「プラハの春」という言葉が頭をよぎり、ほのかな「憧れ」にも似た気持ちに誘われます。

小高い丘にあるプラハ城からヴァルダウ川を望みその中心にあるカレル橋と対岸の街並みの眺望は譬えようもなく美しい。カレル橋は世界中からの観光客で賑わっていて大道芸やみやげ物の露店が楽しい。プラハ城からだらだら坂を下り、カレル橋をぶらぶらと渡り、対岸の旧市街を歩く。ゴシック、ロココ、バロックなど時代を超える建築様式の建物が立ち並びしばし時を忘れさせてくれる。

しかし市街を散策している内に雨が降り出し、期待していた旧市庁舎のからくり時計はアッケなく終わってしまう。スーベニヤショップのボヘミヤグラスはおいそれとは手が出ないものばかり。おまけに夕食のレストランでのボヘミヤ舞踊も田舎踊りにしか見えない。これらの勝手なあれやこれやが折角のプラハの印象を少々薄めてしまいました。

今回のツアーではなぜかプラハは１泊しか日程がとれず、歴史の舞台となったヴァーツラフ広場を始めとしてヨーロッパ最古のユダヤ教会のシナゴーグなどはバスの車窓からの見学に終始したため、チェコの長い圧政の歴史や民衆の蜂起の話をガイドから聞いてもいまいちピンときませんでした。しかしチェコ人がチェコ語を使う事を長く禁じられたがマリオネットだけは許され、それによって自国の文化を継承したと聞かされた時は思はず胸が詰る思いで人形を見詰め直してしまいました。駆け足観光で時間がとれず「マリオネット劇場」に足を運ぶ事ができなかったのは今も心残りのひとつです。街のあちこちに飾れたマリオネットの人形たちを見るにつけ、チェコのひとびとの祖国にたいする熱い思いを彷彿し、思わずスメタナの「わが祖国」の CD を記念に買ってしまいました。

街の真ん中を流れるドナウ川を挟んでブタ地区とペスト地区に分かれる「ドナウの真珠」とたたえられるブダペストの町は譬えようも無いほど美しい街だ。特に王宮の丘のあるブタ地区からドナウ川を臨み国会議事堂を中心としたペスト地区の町並みの眺望は素晴らしい。

　そこには滔々と流れるドナウを挟んで中州の島全体が緑の公園「マルギット島」を遠く頂点にして西の王宮と教会の街ブタと東の中世の街ペスト、両地区を「くさり橋」が結ぶ大きな三角形の織り成す自然と一体となった人間の作り出した感動空間が存在していました。

しかしなんといっても最高なのはその夜景につきる。

希望者で船を一艘チャーターして船上から夜景を見ようという企画が盛り上がり、日本円で@5,000 円で１ドリンク付ということで交渉成立。美しい夕焼けに送られ船上の人となる。

暮れなずむ街が時間の経過につれライトアップの光が増す。その中を「青きドナウ」の BGM をバックにビールを飲みながら流れに乗り、また逆らってゆったりとブタペストの街の美しい夜景を眺める２時間余。遠く王宮の丘の上の自由の女神が､美しくライトアップされたくさり橋が､国会議事堂がゆっくり流れてゆく。「ナポリを見て死ね」とうい言葉があるが、この言葉はブダペストにこそふさわしいとの思いでした。

　ブダペストはまた温泉の街でもある。ホテルには当然プールつきの大きな浴槽がいくつもある。少し郊外にでると道路からすぐ入ったところにいくつもの露天風呂があり大勢の市民が入浴を楽しんでいる。しかしこちらの風呂はすべて水着着用でプール感覚のため、日本的な「いー湯だな♪」とはいかないのがはなはだ残念でした。

第5章　道中あれこれ

★まずは食い物の話

　なにはともあれこの時期にしか口に出来ないものといえば、生の白アスパラガス。日本にいる時からそのうまさを聞いていたので一度は食してみたいと念願していたが、たまたまザルツブルグ城の中の露店で売っていた。わが女房殿は料理に関してはなかなかのこだわり派で、旬の食材をもっとも美味い調理法で食わせてくれるという特技を持ち合わせている。早速一束１１ユーロ（結構高いが）で

買い求め、返す刀でスーパーで皮むき器と白アスパラに一番合うオランダ・ソースの素と塩（ザルツブルグの岩塩）、胡椒を買い求める。ホテルに立ち返るや持参した携帯用の電気ポット（このポットは何十年も前からわが家の海外旅行に欠かせぬ品物で、昔はホテルに電気ポットが常備されていなかったし、当然ミネラルウォータも普及していない。お湯を沸かしてはお茶を飲んだり、日本から携行してきた即席麺やレトルト食品で口に合わない現地食の代用をさせたりとかで大活躍してきた年季物）で茹で上げる。茹で立てのアスパラガスの香りが部屋一杯に広がる中、ビール片手に夫婦二人だけのこのひそかな喜びに浸っておりました。

旅の仲間の元商社のエクゼクティブもアスパラ好きのグルメ通。この機会に昔食した「本物の味」を味わいたいとの思いで期待を寄せておられたようだが、機内食やレストランのアスパラには不満たらたら。オーサカのお節介おばさんよろしく女房殿が茹で立てを「おひとつ」とおすそ分けしたところ大層感謝感激され何度もお礼をいわれました。

まさに本物の味だったのだろう。

そのほかとしては、生来お米と日本酒大好き人間で、パンとチーズに関しては名前も種類もまったくの方向音痴のワタクシメですが、概してホテルのパンとチーズは美味くどこの国でも食事に不満はなく、お蔭で持参した即席めんやレトルトと食品のお世話にならなくてすみました。これも「ビジネスクラス・・・」の効果かもしれません。

特にチーズがこんなに多くの種類と味があるとは不覚にもツユ知らず、何種類か買って帰ったが、美味しいものはどこで食っても美味しいと再認識している次第です。

★人間模様（かけすのサミー？）

今回のツアーは先に述べたようにほとんどが高齢者の１０組の夫婦とこれまた妙齢？のご婦人の二人連れの計２２名のメンバーだった。昔のツアーは気の利いた添乗員ならどこかで全員の自己紹介をする機会を設けたり、中には全員の住所氏名まで入った書類を配ったりしてメンバーのコミニケーション作りに腐心していたものですが、最近は「個人情報」の問題でそういったことは一切ない。メンバーの名前一つにしてもホテルのルームキーを渡す時にしっかり記憶しておくしかないのははなはだもってサミシイ限り。しかしそれはそれでメンバーの中に「情報屋」がいて自然と色んなことが耳に入ってくる。「だれそれさんのご主人は元〇〇だ」とか「だれそれさんの奥さんはバツイチ」だとか個人の職業、年齢、資格、財産、結婚暦からご婦人の装飾品のリストまで。それはそれはありがたい？貴重な存在でした。面白がって聞いてあげると「新ネタあり！」といっては身体をよせてくる。その様は昔見た子供向けアニメの「森のロッキーチャック」の中のキ

ャラクターで「ニュースだよ、ニュースだよ」と叫んでは噂話をばらまいていく「かけすのサミー」を彷彿させ、夫婦だけの会話ではサミーおばさんとひそかに呼んで面白がっていました。
しかし困った事に、ネタをあげたのだから「あなたのネタも出しなさい」と迫られて結局こちらの「個人情報」もまたたくまに知れ渡ってしまったことです。
★おみやげあれこれ
　ウイーン、ザルツブルグに関して言えば、お土産品はモーツアルト一色。チョコレート、ボンボン、キャンディーの類は勿論ありとあらゆるものがモーツアルトと大書されモーツアルトさんも草葉の陰で苦笑していることだろう。日本でも観光地に行けば〇〇饅頭・煎餅の類は数知れず、お土産商法は洋の東西を問はないものだとつい感心してしまう。
　お土産品で好評を博したのは、ザルツブルグの岩塩とチーズ各種であった。岩塩は日本食の天ぷらといわず、刺身、寿司にも合うし、チーズにいたっては先に述べたように日本のものとは『まったくの別物』で、ワインのお供としては最高である。
　ワインも現地で美味いのもあったが、とても持ち帰る体力が既にない。
マイセンの磁器もボヘミヤングラスも目の慰めにはなったがおいそれとは手を出しにくい代物ばかり。

結局旅の思い出の「高価？な」土産品はハンガリー刺繍のテーブルクロスひとつにとどまってしまいました。
　あれこれ記憶を頼りに筆を進めてきたが思い違い、記憶違いで見当はずれの箇所も数々あろうとも思われます。　ボケ始めた老人のこととてご容赦賜りたく存じます。
冒頭に述べたように古女房殿と「これが最後の長期旅行」と考えていましたが、ご一行の老人パワーに刺激され「これが最後の最初？」と新たな「旅心」がうずき始めている今日この頃です。その節はまたお便りさせていただきますので懲りずにお付き合い下さることを念じつつ。

了

２００５．７　南なん亭にて